

特集「ナショナリズムの表現」：曲亭馬琴の対外意識：「水滸後伝批評半閑窓談」の評論を手がかりに

著者	黄 智暉
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	189-200
発行年	2010-08-10
URL	http://doi.org/10.15002/00022634

曲亭馬琴の対外意識

——「水滸後伝批評半閑窓談」の評論を手がかりに——

黄 智 暉

はじめに

馬琴の対外関心については、現存する大量の日記や書簡にその一端を知ることができ、たとえば志筑忠雄『鎖国論』（享和元〈1801〉年成、ケンペル『日本誌』一部の和訳）をはじめとする、異国のことを記した書物の繙読が天保3（1832）年から蛮社の獄の起こる同10（1839）年まで続いたことがわかる^①。これに関連して、馬琴旧蔵本『鎖国論』に見られるその頭注や、『独考論』（文政2〈1819〉年成、只野真葛『独考』の評論）の記述などから、豊臣秀吉の朝鮮出兵を国内の安定を図るための策とするケンペルの考えを評価している一方、西洋人を「智術をのみたふとみて、行状をよそにする」「狡にして、不人なる」「夷狄」と馬琴が批判していることもわかる^②。

これらの馬琴の言説は、当時の日本を取り巻く国際状況に対してのものと捉えられ、ことさら「開国」「鎖国」という、政治的な議論も関わってきて確かに興味深い。読本をはじめとする小説の創作の場合はどうであろうか。「異国」のことを描いた馬琴読本とえば、まず『椿説弓張月』（文化4-8〈1807-1811〉年刊、以下『弓張月』）が想起されよう。源為朝が生き残って琉球へ渡ることを描いたものであるが、白話小説『水滸後伝』（『水滸伝』の続編、混江龍こと李俊を筆頭とする梁山泊の面々が暹羅〈シヤム〉に進出するという話）に基づくところが多い、と早くから指摘されている^③。ここに「日本→琉球」「中国→暹羅」という、パラレルに位置づけられる二つの対外意識が浮かび上がってくる。作品の内容もさることながら、執筆の動機や成立の事情などから両作品を比較することによって、馬琴の対外意識をある程度相対化することができる

と思われる。

1 『水滸後伝』の作者と成立

現存する『水滸後伝』の刊本には、「古宋遺民著、鴈宕山樵評」とあるもの（明の万暦36〈1608〉年鴈宕山樵序、以下「原本」）と、「古宋遺民鴈宕山樵編輯、金陵憨客野雲主人評定」とあるもの（清の乾隆35〈1770〉年野雲主人こと蔡元放序、以下「重訂本」）とがある。馬琴と『水滸後伝』との出会いは、享和2（1802）年の京坂旅行の際にさかのぼる。この旅での見聞を記した随筆『鞆旅漫録』（同年成）巻之上・二十八「絵巻物きりよまんろく付水滸後伝目録」⁽⁴⁾によると、倉卒の間に『水滸後伝』を読むことができたという。その回目なども抄録されており、「……金陵憨客野雲主人評定」とあることから、この時馬琴が目にしたのは乾隆年間の重訂本であることがわかる。はるか後の文政末に殿村篠斎から原本を借り、天保初年に自ら購入した重訂本とあわせて校訂を行った。そして天保2（1831）年に『水滸後伝』全般に関する本格的な批評『水滸後伝批評半閑窓談』（以下『半閑窓談』）を書き上げた。

『水滸後伝』の原本は「古宋遺民著」と銘打っており、評者の鴈宕山樵による「総評」に「遺民不_レ知_二何_一 許人_一、以_レ時考_レ之_二当_二去_一 施羅之世_一未_レ甲_一、或_レ与_レ之_二同_一、時_一不_レ相_二為_レ下_一、亦未_レ可_レ知_一」（『半閑窓談』評一所引）⁽⁵⁾とあるように、『水滸伝』の作者施耐庵・羅貫中とはそれほど時期が離れていない人物としているが、あくまでも偽称であり、原作者はほかならぬ鴈宕山樵と考えられる。この点については、『鞆旅漫録』同所に、

コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ関白ノ名ヲ聞テ久シ。依テ大将ヲ関白トス。胡蘆スルニ堪タリ。

とあるように、『水滸後伝』では日本の大将が「関白」という称号で登場することから、作者が宋・元の人ではないことに馬琴も早くから気付いていた。後に文政13（1830）年3月26日付の篠斎宛書簡では、元初の人が当局の取り締まりを無視して宋王朝の遺民と自称するはずがないとし、さらに『半閑窓談』

評一においても、関白という称号が豊臣秀吉の朝鮮出兵の際にはじめて中国に伝わったものであり、元の人が聞き及ぶはずもないとするなど、改めて「古宋遺民」が偽称であることの根拠を示している。

また、蔡元放の重訂本が原本の著者と評者を混同して「古宋遺民鴈宕山樵編輯」と掲げることについても、

遺民と山樵が、人を欺く偽称なれども、万曆中の人なれば、宋元を相去こと、既にしていと遠かり。これを古宋の遺民といはゞ、三百許歳の翁なるべし。こも笑ふべき事にあらずや。 (『半閑窓談』評一)

と一蹴しているが、原本の鴈宕山樵序の日付をひとまず信用して作者を明の万曆年間の人としている。

果たして馬琴の言うとおりに、この「古宋遺民」というものは単に人を欺くための偽称なのであろうか。近代になると、原作者とされる鴈宕山樵は明末清初の陳忱（生年未詳-1662以降）であることが判明し、作品の成立時期に関して例の序文のいう万曆36（1608）年より少なくとも数十年遅れていると考えられ、実際の刊行年も清初の康熙3（1664）年であると確認された。なぜ意図的に作品の成立をでっち上げたかについては、民国初期の学者胡適の論文では、

陳忱は明末遺民、絶意不仕清朝的。他的朋友多是這一類的亡国遺民。這一層很可以解釈他托名「古宋遺民」的意思了。……当時禁網很密、此種書不能不借「古宋遺民」的名字。……鄭成功拋台湾在一六六〇年。『水滸後伝』写的暹羅、似暗指鄭氏台湾。⁶⁾

とあるように、明の遺民である陳忱が決して清に仕えようとしなかったことをはじめ、当時出版に関する当局の取り締まりが厳しく、「古宋遺民」という名前を借りるしかないことや、『水滸後伝』で描かれる暹羅が、実は台湾の鄭成功のことをひそかに指していることなどが指摘されている。つまり、明末清初の人である『水滸後伝』の作者が「古宋遺民」と自称しているのは、単に宋が元に滅ぼされたという「過去」の歴史を嘆くためでなく、明が清に取って代わられ

たという「現在」の政治的状況に対する憤りをも洩らしているのである。また梁山泊の面々が生き残って暹羅に赴く話を描くのも、台湾を本拠地として清に抵抗し続ける、国姓爺こと鄭成功の存在を仄めかしていると思われる。

作者にとって清は正当性を持たない異民族の政権であり、その代わりに台湾にある鄭成功の政権に漢民族としての希望を託したわけである。馬琴も国姓爺のことをよく知っているはずであるが⁽⁷⁾、ここでそれを見落としているのは、原本の鴈宕山樵序の日付によって『水滸後伝』を実際より数十年も早い成立だと信じているからであろう。

2 山田仁左衛門の活躍と『水滸後伝』

ただし、万暦36(1608)年という鴈宕山樵序の日付の信憑性に馬琴が全く疑問を呈していないわけでもない。はじめて『水滸後伝』を目にした享和2(1802)年という早い時点で、

寛永年間、山田仁左衛門といふもの、暹羅^{シヤムロ}国に渡りて登用せられ、大国あまた領せしことあり。その事、智原五郎八が暹羅記事にくわし。しかれば水滸後伝の作者、粗^ほ山田仁左衛門が事を伝へ聞て、李俊がことに撮合せしにや。……再按するに、山田仁左衛門が事は、唐山^{もろこし}にて水滸後伝の作ありしより少し後なり。かの書に撮合せしにはあらざるなり。余が考別記にあり。今亦贅^{ぜい}せず。(『鞆旅漫録』前掲箇所)

というように、李俊が暹羅の王になるという『水滸後伝』の設定が、当地における山田仁左衛門という日本人の活躍に示唆を受けたものだと馬琴はいったん推論してみたが、『水滸後伝』のほうが先だとしてすぐ自説を否定した。なお、「別記」とは具体的に何を指すか定かでないが、文政末の『水滸後伝』再読をきっかけに、山田仁左衛門の活躍に関する馬琴の持論がまた繰り返されることとなった。

まず、文政13(1830)年3月26日付けの篠斎宛書簡には、

山田仁左衛門、暹羅国へわたり、重用せられし始末、実録等も御座候はゞ、被成御覧度よし蒙命、承知仕候。『暹羅記事』といふもの、一卷有之。尤珍書に御座候故、先年うつしとらせ、秘蔵仕候。……『水滸後伝』暹羅の段は、多く此山田仁左衛門事を伝へ聞きより思ひおこせしなるべし。『巡島記』も是也。

とあるように、一度否定したにもかかわらず、『水滸後伝』と山田仁左衛門との関わりを改めて取り上げると共に、自作の『^{あさひなしまめぐりのき}朝夷巡島記』(文化12〈1815〉年-文政10〈1827〉年刊、以下『巡島記』)の構想もその活躍に示唆を受けているという。

そして天保2(1831)年の『半閑窓談』においても、例の持論を取り上げた上で、

今又つらへおもひみるに、かの山田仁左衛門が、暹羅王に重用せられて、大国を領せしは、天朝寛永十(1633——筆者注、以下同)年のころ也。又山樵が水滸後伝を作りしは、明の万曆三十六年の秋なりければ、天朝慶長十三年(1608)に丁れり。このころ既に仁左衛門は、暹羅に赴きたりといふとも、かれが重任せられしは、寛永中のことなれば、そを水滸後伝に撮合せしにはあらざる也。

(評二)

という。具体的に年次を並べることによって、『水滸後伝』の成立のほうが先であることを確認し、山田仁左衛門とは無関係だと結論を出したものの、

しかれども、古宋遺民の偽称の如く、件の鴈宕山樵も、明人にはあらずして、清の康熙の年(1661)などに、作り出したりけるを、ふるめかさんとして万曆中の、著書にしたるも知るべからず、と疑ひ思ひしこともありしを、今又おもへばさにあらず。後伝の原本は、筆工の書体、彫刻の精妙なる、またへ是明板にて、これを乾隆の重訂本に比れば、実に雲壤^{ケジメ}の差別あり。

(同上)

とも説明している。「古宋遺民」という偽称の例もあって実は康熙年間の成立かも知れないと疑ったこともあるが、原本の印刷の精緻さなどからしてやはり明の刊行であることに間違いはないという。

前述したように、万暦36(1608)年という鴈宕山樵の序文の日付は当てにならず、『水滸後伝』は正しく康熙3(1664)年の刊行であるため、この点では馬琴の疑いが的中したことになる。ただし、李俊が暹羅へ渡ってその地の王になることについては、前作『水滸伝』の末尾にすでにそれらしき記述が見られる⁽⁸⁾。つまり、山田仁左衛門の事跡と年代的に合ったとしても、『水滸後伝』の李俊のモデルが暹羅で活躍している日本人だという仮説は必ずしも成り立つとは限らない。そもそも享和2(1802)年に一度否定されたこの仮説は、二十数年間の歳月を経て再び馬琴の脳裏に思い浮かんだのはなぜであろうか。『水滸後伝』の設定をたびたび日本人の事例に関連付けようとしていたのが明らかであるが、この説に託された彼の思惑はどのようなものなのか、以下、考えていきたい。

3 対外意識とナショナリズム

前述のとおり、『水滸後伝』は宋の遺民に仮託した明の遺民が書いたものであるが、こうした中国の王朝交代、ことに異民族の統治に伴うナショナリズムの発露を、馬琴もある程度見出している。例えば、『水滸後伝』では暹羅の王が漢の將軍の後裔とされ、その妻も宋の高官の娘として設定されているが、これについて馬琴は、

後に玉芝公主をもて、花逢春に妻あはするとき、蛮種に嫌ひあれば也。明人は胡元の夷狄に懲りて、〔割注〕胡元は、唐山の服色を改め、なべて髪を剃せたり。かゝる筆さきみにも、云云と写したれども、今の清主は、韃種の部落にて、又服色を改め、頭毛を剃せたらばいかゞはせん。是等によりても、彼の人の、今も明の世をなつかしく思ふべし、と猜する也。

(『半閑窓談』評三十七)

というように、後に花逢春（『水滸伝』の花栄の子）と結婚する暹羅の王女も漢民族の血を引く者であることを保証するためだと評した上で、明の人である作者にとってかつての元の統治が忌々しい過去であるのと同じように、今の中国人も清の支配を憎たらしく思っている、と推論している。天保4（1833）年11月6日付篠斎宛の書簡においても、清初の劇作家李笠翁が清王朝への仕官を辞退したことを取り上げ、さらに明の思想家李卓吾をも清初の者と勘違いして新政府に仕えようとしないうことを評価している⁹⁾。異民族の支配に対する文人の反抗意識に十分共感を覚えていると思われる。

にもかかわらず、『水滸後伝』からいわゆる「反清復明」の願望が読み取れなかったのは、明の滅亡（1644）より遡ること数十年も前の成立だと信じていたからであり、ましてその後の台湾における鄭氏の政権（1661-1683）との関連には思い至るはずもなかった。あるいは、山田仁左衛門の事例に積極的に関連付けようとする馬琴にあっては、鄭成功の話との関わりの可能性が無意識のうちに排除されていったとも言えよう。ここに自分の作品の粉本として使ってきた中国の小説から日本人の影響が見つけられそうになった時の喜び、いわば一種の優越感に近い感情が見て取れる。

馬琴の読本に白話小説をはじめとする中国文学の影響が多く見られるのは周知のことであるが、中国に対してそれなりの対抗意識、場合によっては優越意識さえ持っているとも考えられる。例えば、『半閑窓談』でまず目に付くのは、「人を欺く」「から人の癖」というような表現であろう。これらは「古宋遺民」という偽称を使う『水滸後伝』の作者を批判するのに使われている。一方、『水滸後伝』に登場する日本人、例えば撲天鵬こと李応が薩摩の海岸で遭遇する日本の海賊（第三十回）については、

天朝は、辺境の細民までも、武勇^{トツクニ}の他国に勝れし事、隠れあるべうもあらざれば、李応等三千五百の兵をもて、捷を取ることかなはず、千疋の紬段^{アツカヒ}綿布を贈りて、和解を入れたるよしに作りたり。便是 皇国人の武勇には、誣かたきよしあれば也。 （『半閑窓談』評三十六）

というように、梁山泊の軍勢に手を焼かせていることから、馬琴はこの話を日

本人の武勇さを裏付けるものとしている。ほかにも王位の継承などの問題をめぐって、「纂立」を許容する中国人の考えを「漢こゝろ」として批判するのに対して、「革命」を認めない日本人の考えを「皇国こゝろ」としてその優越を主張しているところに、本居宣長ならではの皇国意識さえ窺われる。

すでに指摘されていることであるが、馬琴の皇国意識の例としては、孔子の画像に賛して「日本夷人」と自ら署名する荻生徂徠を「腐儒」と批判していること、また彼が江戸を「燕都」と称して豊臣氏を「豊王」と呼ぶのを論難していることなどが挙げられ、特に天皇がいるにもかかわらず豊臣氏を「王」と呼ぶのをよしとしないのは、征夷大將軍を「日本国王」と称する太宰春台を批判する宣長の立場と同じように、天皇の存在を絶対的なものとして「革命」や「纂立」を認めないからである⁽⁴⁰⁾。ちなみに『水滸後伝』でも『弓張月』でも最終的には異国の者が王位に就くことになっており、ここにもそれぞれの対外意識が反映されているが、詳しくは別稿に譲った⁽⁴¹⁾。

以上のように、たびたび中国に対して日本の優越を主張する馬琴ゆえに、暹羅が舞台である『水滸後伝』と、暹羅で活躍する山田仁左衛門とを関連付けようとするのは、ある意味で当然のことである。『水滸伝』末尾の暹羅に関する記述を無視し、よく知っているはずの国姓爺の話との関係を見過ごしているのもこのためであろう。

4 新天地への憧れと島巡りの構想

馬琴の読本に異国のことを描いたものはそう多くないが、主人公が新天地としての「島」へと渡るといふ構造を持つものが少なくない。例えば、天保2(1831)年8月26日付篠斎宛の馬琴書簡に、

(『鏡花縁』の——筆者注) 夷国巡りの段に、『山海経』の地名をとり出し候事は、愚案と暗合の事に御座候。『巡島記』朝夷が嶋巡りの段は、『山海経』にてつゞりなし候はんと、かねての腹稿有りながら、是迄口外不致候処、『鏡花縁』を見て我を折申候。乍然、古人と暗合も歡しく存候へば、此島巡りは、『侠客伝』の末へつゞりなし、あらはし可申存候。これは

『巡島記』立消いたし候故、そのかほりに御座候。

とあるように、『巡島記』で描く予定だった異国めぐりの話を、馬琴は『開卷かいかん驚奇俠客伝きょうききょうかくでん』（天保3-6〈1832-1835〉年刊、未完）の後半に取り入れようと計画を立てていたが、後者の刊行中止でついに実現しなかった。

そもそも馬琴がこれほど異国めぐりの設定に執心しているのはなぜであろうか。これについては、『弓張月』をはじめとする読本の主人公には「流され王としての島の王」という性格を与えられており、こうした人物設定にほかならぬ鄭成功の話によって象徴される東アジアの王朝体制の激変による影響が見られる⁽¹²⁾、という指摘がある。新天地としての「島」という構想を支えているのは、ほかならぬ鄭成功の活躍という歴史的事実であった。また、異国の話ではないが、新天地での再起という意味では『南総里見八犬伝なんそうさとみはっけんでん』（文化11〈1814〉年・天保13〈1842〉年刊）も同一系譜の物語と言えよう。特に後半の対管領戦を、西洋を主とする外敵の襲来への、幕末日本の持つ危機感の表れとして解釈することもできる、と言われている⁽¹³⁾。単に自国を誇る優越意識だけでなく、日本を取り巻く緊迫した国際情勢という切実な問題も、読本の創作、ないし白話小説の批評に馬琴のナショナリズムを現出させた要因の一つであろう。

『水滸後伝』についても同じようなことが言える。王朝交替の際に成立したこの作品に作者のナショナリズムが託されていると同時に、馬琴を含む読者のナショナリズムも誘発されている。山田仁左衛門に関する馬琴の説はともかく、鄭成功の政権との関わりについては従来当然のように言われてきたが、作者の生没年や作品の成立に関しては不明な点が多く、必ずしも鄭成功のことと関係があるとは限らない、という指摘もある⁽¹⁴⁾。つまり、鄭成功が台湾を本拠地にした康熙元（1661）年より前の順治末期にすでに書かれている可能性もあるということであるが、この場合、胡適をはじめとする近代中国の学者たちの解釈は臆断になる。その思惑の裏には、日本をも含む列強の植民地支配を憂う近代中国の知識人のナショナリズムが働いていたのは言うまでもなからう。

おわりに

「古宋遺民著」と掲げているところにすでに一種のナショナリズムが認められる『水滸後伝』であるが、その矛先が元ならぬ清に向けられている。また、海外への進出がテーマとなっている以上、作者の対外意識もおのずから表れてくる。一方、馬琴は『水滸後伝』に示唆を受けて『弓張月』を執筆したにもかかわらず、李俊の暹羅攻略という原話の設定に関しては、当地における山田仁左衛門の活躍の影響を見出そうとしていた。それに対して、民国初期以来の中国の学者らは、台湾における鄭成功の政権を暗に指すものとして位置づけていた。いずれの説が正しいかを判断するより、異なる時代背景を反映したそれぞれのナショナリズムとして捉えるべきであろう。

特に馬琴の場合、自作の『弓張月』の為朝、及び『巡島記』の義秀はともかく、白話小説の『水滸後伝』の李俊にも山田仁左衛門のイメージを重ね合わせようとしていたのは、新天地や島巡りへの憧れの反映よりも、自国の優越を主張するナショナリズムの発露と言うべきであろう。また、鄭成功の話の影響で『弓張月』などを執筆しながらも、同じくその影響下にあるかも知れない『水滸後伝』の設定を、無関係かも知れない山田仁左衛門の活躍に関連付けようとしたことを考えると、ナショナリズムというものの自体の持つ二律背反的な性格が浮き彫りにされていると言えよう。

注

- (1) 植田啓子「曲亭馬琴の対外関心について」(『言語と文芸』42、大修館書店、1965年)。
- (2) 播本眞一「曲亭馬琴伝記小攷」(『読本研究新集』第2集、翰林書房、2000年)
- (3) 麻生磯次『江戸文学と中国文学』(三省堂、1946年)。
- (4) 『羈旅漫録』の引用は、『日本随筆大成』第1期1(吉川弘文館、1975年)による。以下同。
- (5) 『半閑窓談』の引用は、柴田光彦編『馬琴評答集』5(早稲田大学出版部、1991年)による。以下同。
- (6) 胡適「後水滸伝兩種序」(汪原放標点『水滸統集』所収、1924年、亜東図書館)。
- (7) 文政11年10月6日付篠齋宛馬琴書簡に『台湾鄭氏記事』への言及がある。
- (8) 『水滸伝』第119回に「且説李俊三人竟来尋見費保四個……尽将家私打造船隻、従太倉港乗駕出海、自投化外国去了。後來為暹羅国之主」とある。
- (9) 拙稿「馬琴読本における「雪恨」の理念——中国の戯曲論と関わりを中心に——」

- (拙著『馬琴小説と史論』所収、森話社、2008年)。
- (10) 播本眞一「馬琴の立場——儒・仏・老・神をめぐる——」(同氏『八犬伝・馬琴研究』所収、新典社、2010年)
 - (11) 拙稿「曲亭馬琴における「翻案」と「続編」の問題——『水滸伝』と『水滸後伝』の受容をめぐる——」(『アジア遊学』131、勉誠出版、2010年)。
 - (12) 川村湊「馬琴の「鳥」」(同氏『近世狂言綺語列伝』所収、福武書店、1991年)。
 - (13) 小谷野敦「『八犬伝』の海防思想」(同氏『新編八犬伝綺想』所収、筑摩書房、2000年)。
 - (14) 鳥居久靖「解説」(東洋文庫『水滸後伝』3所収、平凡社、1966年)。

<ABSTRACT>

Kyokutei Bakin's Foreign Consciousness: Clues held by the Critique, "Suiko Koden Hankan Sodan"

HUANG Chih-huei

There are many parts of Kyokutei Bakin's *yomihon*, titled *Chinsetsu yumihari tsuki* (Crescent Moon), fabricating the journey of Minamoto no Tametomo to Ryukyu, which are based on the *hakuwa shosetsu* (Chinese vernacular tale), *Shui Hu Hou Zhuan*. This is a later volume of *Shui Hu Zhuan* (The Water Margin), in which the heroes of Liang Shan Po headed by Li Jun proceed to Siam. It is inscribed as a work by a Song Dynasty old regime supporter, however this is merely a pretext, and is considered to be of the hand of a Ming Dynasty supporter fearing the restrictions imposed by the Shin Dynasty government. As a work born from the sadness of losing ones kingdom, but including the storyline of finding a new world in foreign lands, its interpretation would have differed according to the reader's point of view.

For example, Bakin draws attention to the fact that Yamada Nizaemon was active in Siam at roughly the same time that *Suiko koden* appeared, and tried to connect the tale of Li Jun with the evidence of a Japanese. On the other hand, the thinkers of modern-era China, including Hu Shi, found Li Jun's conquest of Siam in *Suiko koden* to be suggestive of the Zheng Cheng-Kung administration based in Taiwan which continued to resist the Shin Dynasty. Foreign consciousness and nationalism were exhibited point-blank on both sides.

In particular in Bakin's historical-biographical *yomihon* such as *Chinsetsu yumihari tsuki*, we see that the original influence comes from Zheng Cheng-Kung. *Suiko koden* may have received similar influence, yet his intention to then find influence from a Japanese reflects the paradoxical nature of nationalism.